

## オックスフォード大学セント・ジョンズ コレッジ所蔵 中世・ルネッサンス期写本集（マイクロフィルム）

和田葉子

1209年に創設された英国のケンブリッジ大学は今年、800周年を迎え、様々なイベントが開催されている。名門として並び称されるオックスフォード大学の歴史はさらに古く、1167年、ヘンリー2世が英国の学生にパリ大学で学ぶことを禁じてから本格的な高等教育機関として急速に発展し始めたといわれている。これら2つの大学には、中世西洋の人文科学を研究する者にとって、多くの資料が保存され、一定の手続きさえ踏めば、外部の研究者も手にとって調査できるような開かれたシステムになっている。

今回紹介するマイクロフィルムには、オックスフォード大学のセント・ジョンズ コレッジが所蔵する約370の写本のうち、人文科学の分野において特に重要だと思われる中世及びルネッサンス期の写本271点が集められている。ちなみに、このセント・ジョンズ コレッジは英国の前首相、トニー・ブレアが学んだことで知られている。

古い写本が図書館に辿り着き、保存されるに至るまでには、様々な経緯がある。セント・ジョンズ コレッジの図書館に収められている多くの写本にもこのコレッジとイングランドの歴史が反映されている。

西洋史に特に興味がなくとも、ヘンリー8世(1491-1547)が、6人の妃を迎えたことを知っている人は多いと思う。最初の妃のキャサリンには、跡継ぎとして男の子がなかなか生まれなかった。しびれを切らしたヘンリーは離婚を決意、彼女の侍女であったアン・ブーリンと再婚しようとするが、カトリック教会は離婚を認めない。当時のイングランドはローマ法王の支配の下にあり、ヘンリーもかつては敬虔なカトリック教徒だったが、1534年、国王至上法を發布し、ローマ・カトリック教会から離脱、国王を頂点とする英国国教会が成立する。

1536-1541年には、ヘンリーは修道院がローマ教皇庁の支配下にあることを不服とし、イングランド、ウェールズ、アイルランドにあるすべての修道院を閉鎖した。当時、修道院は多くの富を貯えてお

り、400を超えるといわれる修道院の解体により、そこにあった財産はすべて没収され、王室のものとなった。その時、修道院が所蔵していた多くの重要な古い文書が、建物とともに王の家臣に与えられたり、富裕なジェントリー階級の人々に非常に安い値段で売り払われたりする運命となった。

古い写本の価値を知らない人々は、それらを紙屑のように扱い、多くの写本がごみ箱に放り込まれた。その当時、古い羊皮紙が役に立ったといえ、店先で物を買う時の包み紙として利用された時くらいのものであった。また、古い写本が、本の中扉や本の背の補強材料として、製本の際に使用されることもよくあった。ばらばらにされた貴重な写本の数ページが、ずっと後になって学者によって、偶然、まったく関係のない本の背の裏などから、ぼろぼろになって発見され、救い出された例は少なくない。

さて、セント・ジョンズ コレッジは、1555年、仕立屋業者組合の長で後にロンドン市長となったカトリック教徒、トマス・ホワイト卿(1492-1567)によって、創設された。当時、ヘンリー8世はすでに亡くなり、ヘンリーの最初の妃キャサリンの娘であるメアリー1世(1516-1558)の時代となっていた。徹底したカトリック信者で、新教徒を弾圧し、300人の新教徒を火刑にしたので、ブラディ・メアリー(血まみれのメアリー)と呼ばれた女王である。メアリーが王位を継承すると、ヘンリー8世の行ってきた宗教改革は覆され、イングランドはカトリックの国に戻る。

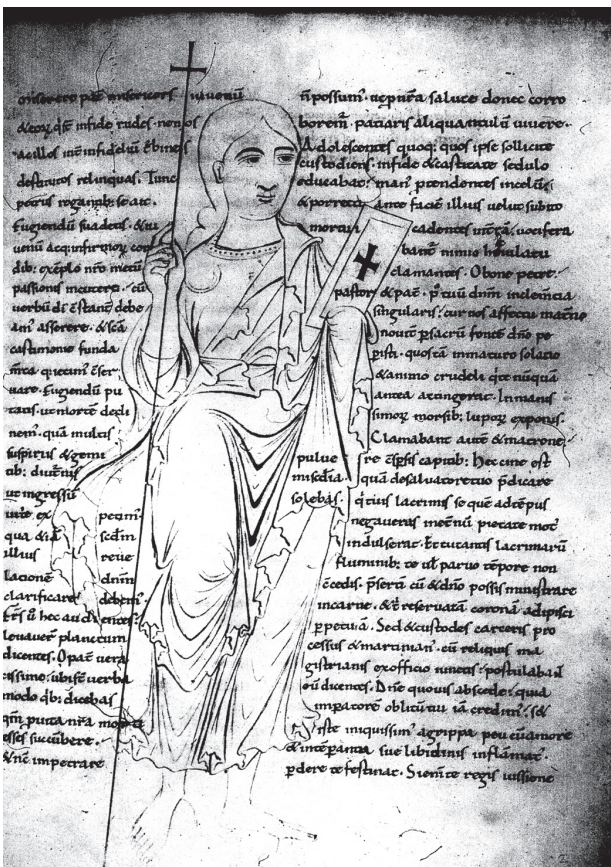
そのような時代にホワイトは対抗宗教改革を推し進めるべく、知性と教養を備えたカトリック聖職者を育成するための教育機関が必要だと考え、1437年に建てられた聖ベルナルド・コレッジを買い取り、そこにセント・ジョンズ コレッジの歴史は始まった。シトー修道会の聖ベルナルド・コレッジは、修道院の解体によって廃止されていたのであった。聖ベルナルド・コレッジが所蔵していたと特定できる中世の写本は、残念ながら、今のところ1つも残存

していない。修道院の解体後まもなく、失われてしまったものと思われる。

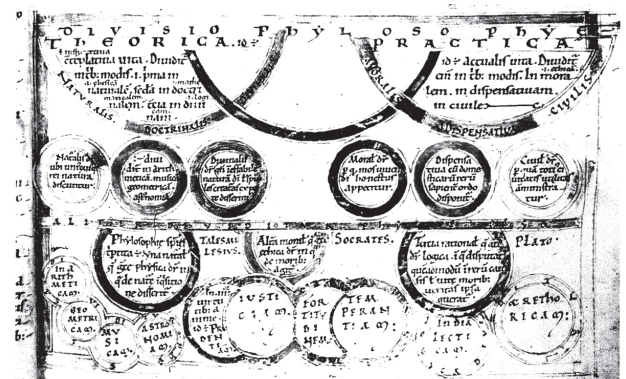
創始者トマス・ホワイトの尽力によって、多くの写本が、修道院の解体によって廃止された30以上の修道院から集められた。トマス・ホワイトの弟、ジョン・ホワイトは本のコレクターであり、兄のために、ハンプシャーにあったアウグスティノ修道会司教座聖堂参事会の小修道院にあった複数の写本を、セント・ジョンズ コレッジに寄贈した。その中には、10~11世紀に筆写されたローマ教皇、グレゴリウス1世 (540頃-604) の『牧者の心得』(セント・ジョンズ コレッジ写本28) がある。本と十字架を手にしたキリストが1ページに大きく描かれており、テキストが絵を避けるように書かれていることから、イラストが先に作成されたと考えられている。ちなみに、この写本は重要なので、デジタル化されていて、オックスフォード・デジタル・ライブラリーのウェブサイト上で、誰にでも閲覧できるようになっている。その他、同じグレゴリオ1世の道徳論 (ヨブ記注解) (写本153; 12世紀)、クレルヴォーのベルナルドゥス (1090-1153) の雅歌講

話 (写本62; 12~13世紀)、ジョン・カシアン (360-450) の教父伝 (写本183; 12~13世紀)、フランスの哲学者、ニコル・オレーム (1323頃-1382) や、14世紀に多くの著作を残したフランスの聖職者、ブルッセのペレリンによる天文学のテキストが収められた写本 (写本164; 14世紀) もジョン・ホワイトが寄贈した写本である。これは、フランスのシャルル5世 (1338-1380) のために、特にフランス語に翻訳されたものであった。

セント・ジョンズ コレッジには、12世紀に書かれた現存する英語による最古の科学書がある (写本17)。宇宙論、数学、医学、文法をはじめとするこの写本は、ケンブリッジシャーにあるソーニー大修道院にあったことが知られている。古英語とラテン語による、イングランドの歴史家ベーダ (673頃-735) の『時代について』や『時間の算出法について』も収録されている。この写本も、修道院解体後、運よく生き残ったものの1つである。



写本28. フォリオ2r. キリストの姿は10世紀後半に描かれ、その後、テキストが10~11世紀に書き加えられたと考えられている。



写本17. フォリオ7r. 12世紀。中世における学問の諸分野が示されている。

しかし、無傷であった訳ではなかった。イングランドの政治家、古物愛好家、古書コレクターであるロバート・コットン卿 (1571-1631) が、この重要な写本から、5葉を切り取ったことが知られている。コットンはこの写本をセント・ジョンズ コレッジから借りたが、勝手に贈り物だと理解し、自分の蔵書カタログに記載した。しかし、返却を迫られると、このうちの5葉をこっそり、切り取ってから返した。この5葉は、現在、他のコットンの「分捕り品」である多くの写本のページとともに、大英図書館のコットン・コレクションに入っている (London, British Library, MS Cotton Nero C.vii, fols. 80-4)。上述の写本17と同じく貴重な写本なので、インターネット上のオックスフォード・デジ

タル・ライブラリーで閲覧することが可能である。

1633年、カンタベリー大主教となったウィリアム・ロード(1573-1645)も、セント・ジョンズコレッジと縁が深く、コレッジに価値ある図書を寄贈している。織物業者の家に生まれたロードは、そのことについて生涯、コンプレックスを抱いていたようだが、オックスフォードのセント・ジョンズコレッジで神学を学び、1611年にはこのコレッジの学寮長、1630年にはオックスフォード大学総長になった。(ちなみに、このロードが上記のコットンに写本を返却するよう手紙を書いたことが知られている。)

1631~1635年、ロードは、ローディアン図書館を建てている。ロードは1636年、このセント・ジョンズコレッジに初めてアラビア語の教授のポストを設けたが、彼が寄贈したのは、ギリシア語やアラビア語で書かれた科学の写本だけではなくた。たとえば、イングランドに初めて印刷機を導入したことで知られるウィリアム・キャクストン(1422頃-1492頃)が印刷した、ジェフリー・チョーサー(1340頃-1400)の『トロイラスとクリセイデ』(1483)と

『カンタベリー物語』(1483)もコレッジに入った。現在、これらは、チョーサーを尊敬していたイギリスの詩人、ジョン・リドゲイト(1370頃-1451頃)の写本、『テーベの包囲』(写本266)とともに、綴じられている。ちなみに、このリドゲイトの写本は、キャクストンと一緒に仕事をし、その後を継いだウインケン・ドゥ・ウォード(1534没)が彼の『テーベの包囲』を印刷出版した時に使用したものである。

先に述べたように、ウィリアム・ロードはカンタベリー大主教の地位にまで上りつめたが、チャールズ1世の側近として精力的に働いたため、最後には裁判にかけられ断頭台に立つこととなる。セント・ジョンズコレッジには、彼の日記(写本258)や、彼がロンドン塔に収監されている時に書いた手記(写本259)も含まれている。

その他、このマイクロフィルム・コレクションの中には次のようなものが入っている。筆者の目にとまった主要なものだけでも、すべてを記すことができないほどたくさんある。11世紀にイングランドで書かれた、エンシャムの大修道院長、エルフリッチ(955頃-1010頃)の文法書(写本154)、ベーダ(673頃-735)の黙示録注解(写本89; 11~12世紀)、南フランスで筆写されたアレツォのガイド(991頃-1033以降)の音楽論(写本150; 11-12世紀)、トマス・アクィナス(1225頃-1274)の『神学大全』(写本59; 14世紀)、クレルヴォーのベルナルドゥス(1090頃-1153)の雅歌についての説教(写本62; 12-13世紀)、リジュのアルヌルフ(1184没)、ソールズベリーのジョン(1120頃-1180)の書簡集、ヒエロニムス(347頃-420)(写本126; 12~13世紀)、カンタベリーのアンセルムス(1033-1109)、シャルトルのイヴォ(1040頃-1115)、ピーター・ダミアン(1007頃-1072)(写本158; 12世紀)、アンブロジウス(340頃-397)(写本163; 12世紀)、リチャード・ロウルの『我を許したまえ』、聖者伝(写本147; 15世紀)、ボナヴェントウラ(1221頃-1274)、ロバート・グロステスト(1175頃-1253)(写本190; 13~14世紀)、ジョン・リドゲイトの『聖母マリア伝』(写本56; 15世紀)、『良心の呵責』、『ロンドン年代記』、チョーサー『小鳥の会議』(写本57; 15世紀)、動物寓話集(写本61; 13世紀)、プビリウス・テレンティウス・アフエル(紀元前195年/紀元前185年-紀元前159年)の喜劇(写本87; 15世紀)、古代ローマ時代の風刺詩人、デキムス・ユニウス・ユウェナリス(60-

Prologue



Goody wyf ther was of kynges kythe  
 And she was somdeel leef & that was seith  
 Of cloth makynge had she such an haunt  
 Se passyd them of pyre and of gaunt  
 In al the parisse wyf was ther non  
 That to the offryng before hyr shold goon  
 And yf ther wold certayn brot was she  
 Than was she oute of al charyte  
 Her harcherys ful fyn were of ground  
 I durste swere they lapede thre pound  
 That on a sonday were on hyr bed  
 Hyr hosen were of fyne scarlet red  
 Ful serpye & tery and shoes ful moyse and nelbe  
 Bold was her face fyre and red of kelbe  
 She was a worthy woman al hyr lyue  
 Hufbondes at the church was hadd she

写本266に収録されている13世紀後半のリドゲイト著『テーベの包囲』とともに綴じられているキャクストンによるチョーサーの『カンタベリー物語』(1483年版)。

130)、クイントゥス・ホラティウス・フラックス (紀元前65-68) の『詩について』(写本192; 15世紀) (イギリスの劇作家で詩人のベン・ジョンソン (1572-1637) が写本87と192を所有していたことが、写本の余白の署名からわかる)、聖母マリアの時課と中英語による祈祷書 (写本94; 15世紀); 中英語で書かれた『良心の呵責』(写本138; 15世紀)、イングランドで最初の本のコレクターと言われているベリーのリチャード (1281-1345) の『愛書家』、フランスの神学者で詩人のリールのアラン (1128頃-1202) (写本172; 15世紀)、ベーダの『イングランド教会史』

(写本99; 12世紀)、マルクス・トゥッリウス・キケロ (紀元前106-43) の『弁論家について』(写本81; 14世紀)、トマス・ホップズ (1588-1679) の『ピヒモス』(写本13; 17世紀)、ジョン・リドゲイトの『トロイの包囲』(写本6; 15世紀)、ジョン・ウィクリフ (1320頃-1384) の『旧約聖書』(写本7; 15世紀)、ヒポクラテス (紀元前460-377) (写本10; 13世紀) など、中世からルネッサンスにかけて当時、知識人の間で読まれていた作品が網羅されている。

近年、写本研究が進み、これまでに編纂され刊行されてきた、所謂「定本」となっているテキストからは知ることのできない、作品の成り立ちや歴史的背景が明らかにされている。写本のデジタル化も盛んで、ウェブ上の鮮明な映像が研究者に非常に有用な資料を提供しているが、ウェブ化には到底間に合わない多くの古い写本が、世界中に埋もれている。しばしば、面白い発見は一見、汚れたみすぼらしい写本から生まれる。そのような写本はデジタル化されないか、されるにしても一番後回しになるであろう。このマイクロフィルム・コレクションによって、オックスフォードに出かけなくとも、日本にいながらにして、より多くの人々がより多くの写本を見ることができ、さまざまな分野の研究が一層深まる大きな助けになることであろう。学内はもとより、関西大学の所蔵であることが広く知られ、学外のたくさんの研究者にも利用されることを心より期待している。



写本61. 13世紀前半。動物寓話集には、ギリシア神話で知られている美しい歌声で舟人を魅了し転覆させる海の精、セイレンも登場する。

(わだ ようこ 外国語学部教授)